

奈良

いのちの電話

2014

秋

第358号

特集

相談の中に浮上する「ひとり親」

社会福祉法人 奈良いのちの電話協会

事務局/〒631-0816 奈良市西大寺本町8-27



TEL : 0742-35-0500

FAX : 0742-35-0533

e-mail : nid@nara-inochi.jp



画・辰巳 寛

しろがねの舞の花櫛おもくして
かへす袂のままならぬかな

与謝野晶子（みだれ髪 舞姫）

清秋

風鐸



皆さんは卒業してから母校（小・中学校）を訪問されたことがありますか？

今は、同窓会を学校ですることは珍しいのかも知れません。小学校の卒業生が、当時の担任の先生を授業中に訪ねる。そんな光景を私が小学生の頃はよく目にしたのですが、最近

は全くといっていいほど見られない姿です。「地域に開かれた学校」を目指す動きがあり、代表的なものは、自治会の夏祭り等のほか、放課後授業や防災訓練もこの一環です。

学校の中心は先生と生徒であることに変わりはありませんが、地域全体が学校に協力していく必要もこれから増えるでしょう。さらに、防犯・安全への備えという面でボランティアの力も欠かせません。

法律・規則があるから学校に協力するというだけでなく、自然に学校に意識を向け足が向くという形ができればいいと思います。小学生の私達が出会ったあの先輩は今頃どうしているのか？きっと先生に励まされ、悩みを乗り越え人生を歩まれているのでしょう。

「尊敬する人物」という問いに恩師を挙げることが当たり前になる。そんな未来が来ることを待ち望んでいます。（樹）



相談の中に浮上する「ひとり親」



「奈良いのちの電話」には、毎日70件前後の相談が寄せられる。当協会では、日々どのような相談が寄せられているのか、それらに対してどのように応じているのかを定期的に検討しながら問題を積み上げ、気になる相談についての見守り等もしている。

これは、いのちの電話が、相談してくる人たちの期待に応えられているのかを検証するとともに、併せて、時には今、話題となる社会現象の一端を相談の中から見つけ出し、必要に応じて相談員の研修テーマに取り上げること等も目的にしている。こうして、絶えず社会から当協会に課せられている役割を忘れない活動の継続を目指している。

そこで、ある日この業務の一端を担当しているグループを取材した。果たして予想どおり、昨今話題に浮上している「ひとり親」問題（母子世帯）で電話してくる人の相談を巡って、国民生活基礎調査の結果発表（H26・7・15）と重ねた話が広がっていた。

ここにその一端を紹介しながら、いのちの電話が担うものについて考えてみたい。

「ひとり親」で育て上げた娘のしっぺ返しが・・・

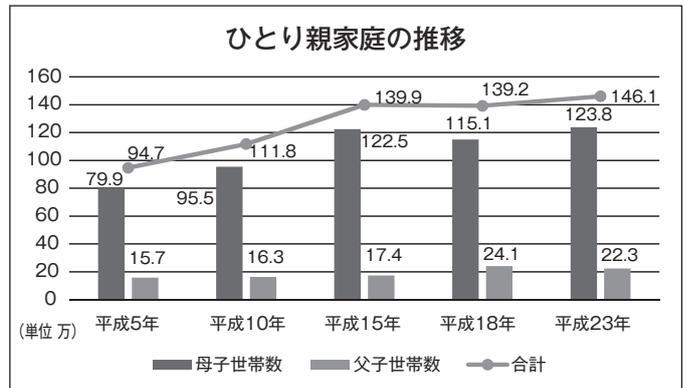
（これは相談の中からヒントを得て再構成したものである）

実母から「お前なんか欲しくなかった」と言われて育ち、16才で家出。遊び相手の子を孕みやむなく結婚。出産直後に相手は行方不明。助けてくれる人もなく、育児ノイローゼで子どもは一時乳児院へ。体調が戻り、娘が小学校入学となったことを機に、生活保護を返上し働く。

しかし、重労働で倒れたり、住込み条件の飯場賄い婦の時などは、やむなく施設や里子に預けた。娘は我慢強い子で聞き分けもよく、成績も良かったので、自分が学歴のなさで苦労した分、娘に期待をかけ、一生懸命働いて学資を貯めていた。大学まで行かせてやりたかった。

ところが、娘は高2の時にバイト先で知り合った男性の子を産み、卒業を目前に中退。孫が小1になった今も、相手は大望があると言って定職につかないまま居候中。娘が働いて生活を支えているが、性格が一転し、疲れがたまると苛ついて、子ども時代に自分が我慢してきた恨みを今になって母親の私にぶつけてくる。

私はうつ病に罹りながらもパートで働いているが、娘からの悪口雑言に我慢の限界がくるたび、いのちの電話で辛さを訴えている。



◆女手一つの子育ては25年前と変わらない社会

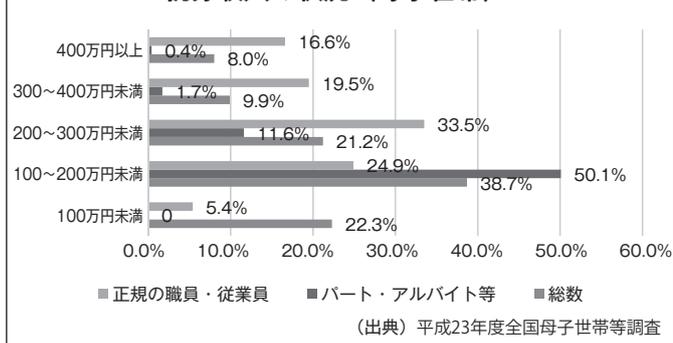
この人は、夢を娘に託して働き通してきたが、その頑張りの目標が娘の手で壊されてしまった末に、娘世帯に家も占領される。苦勞が実らなかったどころか、拳句の果てに娘から子ども時代の我慢の逆襲に晒される。ひとり親ですべてを女手一つで支えてきたのは、何のための日々だったのかと、報いのなさのうえに、頑張りが裏目になったと嘆き続ける。

厚生労働省から発表された報告書では、働いても働いても貧困から脱却できない「ワーキングプア層」の人たちが増加していることが数値に現れていた。この貧困率を押し上げている主要因が、離婚増加による母子世帯の漸増と、ひとり親たちの低収入であった。母子家庭の親の就労率は8割強だが、非正規雇用が圧倒的で、懸命に働いても平均年収は183万4千円。8割の世帯は児童扶養手当を受給しているが、離婚した相手側からの養育費は、たとえ約束を取り交わしていても実質上不払いがほとんどというのが実態。さらに、10代で母親になった人たちは、中卒か高校中退という学歴から職種が限定されてしまう。

現代のひとり親たちの暮らしの実態から改めて格差社会像が浮き彫りになった報告と、25年前から苦界を這い回りながら子育てしてきた人の訴える生き様と苦悩する姿を重ねてみて、4半世紀たって制度的に拡充されたかにみえる社会でもしんどい状況は改善されていない実態に愕然とした思いになった。

世相は女性が働くことも一般化し、離婚への抵抗感も薄れてきている。子育て中の家族形態も多様になり、ひとり親で子育てすること自体は、一見社会的にはし易くなっている。しかし、それを維持するための経済基盤となる労働条件や社会保障制度上では、改善されず問題が残っていて、国際的にも後進国並みのレベルを脱却できていない。そんな我が国の姿が相談からも散見できる。

就労収入の状況（母子世帯）



◆何が数年間も電話をかけるようにしているのか

何度も電話をかけてくる人たちがいる。さまざまなニーズがあるのだろうが、この日に取り上げられていたひとり親で子育てしてきた人に対して、いのちの電話は、どんな出会いをしているのだろうか、この人との数年間を振り返った。

そろそろ母親業を返上してもよい段階になったと思った時に、思いもかけない形で更に苦労が上塗りされた。それでも、がむしゃらに働く必要があった時より、少しだけゆとりができたのだろう。人生の折り返し点に立ち、話し相手が欲しくなっていたのだろうか。自分の人生を振り返り問題点を見つめ直さねばならないと気づいているのかもしれない。いのちの電話はいつでも誰かに出会えるところなので、心の波立ちが収まらなくなった時、受話器を持つのであろう。そしてその時に、自分を振り返りながら人と語ることで安らぎ、少しずつ何かに気づいていくのであろう。

一方、関連する子育て支援事業チャイルドラインの相談窓口にはひとり親家庭で養育されている子どもたちからの声が入る。深夜遅くまで働く親たちを待ちながら、寂しくなっていく子どもたちは、疲れ切って帰宅する親の前ではいつでもよい子になると言う。この親の苦労を労わる心根が痛々しい。本当は飛びついて甘えたいし、ぐずりたいのを我慢している。親たちはそんな子どもの気持ちにたとえ気づいたとしても、当面の生活に必死にならざるを得ない。そんな親の頑張りや、時には虐待めいたことになったとしてもお互いが目をつむる。その積み重ねが反抗期に堰を切ってしまうことになるのかもしれない。

第三者の相談員には、我慢していた娘が、気持ちの限界点に穴を開けてしまい、抑圧していた分だけ一気に沸点が高まって荒れ狂い言葉の嵐を吹きまくる様と、その矢面に立たされて小さく萎縮する母親の姿が痛々しく映る。その姿の背後や脇に寄り添い、その訴えに耳を傾け、ひたすら聴く。本当は甘えたかったという娘の本音をも背後に聴きながら。そのことが分かりあえて素直に互いの口から言葉にして出せるようになる日を願いながら。だから、その日がくるまで付き合い、支えていきたいと思っている。

今回の取材で、こうした気持ちで電話相談に向きあい、一つ一つの相談を大切にしている現場の確かさを改めて確認できた気がした。

(K・U)

“自殺者3万人社会”のなかで考える

いのち

18

— いのちの宝石 —

登大路総合法律事務所
弁護士 田中啓義

「いのち」とは、「きらきらと輝く宝石」のように思います。「いのちの宝石」は、人が悩みを抱え込んでしまった時に、いつか、くすんでしまったように見えても、磨けば必ず輝きを取り戻すことのできる強く美しい宝石だと思います。

私は、職業柄、経済、家庭、仕事等の問題でいろいろな深い悩みを抱える方々に接してきましたが、その方々の悩みが解決されることによって、その方々の「いのちの宝石」の輝きを取り戻される場面を沢山見てきました。

手広い事業を展開されるようになった会社の社長は、お会いした当初、会社の業績不振故、運転中の自車を阪神高速の鉄柱に何度も衝突させて命を絶とうと思ったとおっしゃっていました。しかし、会社の法的倒産処理を決意され、その清算手続きを遂行してゆく中で、もう一度、トラック一台から奥様と商売を始めた若かりし頃に立ち帰って再出発しようと「いのちの宝石」の輝きを取り戻されました。

10年以上にわたる夫の裏切りと偽りが明らかになり、自分の生きてきた意味すら見失ってしまった奥様がいらっしゃいました。しかし、夫との離婚紛争の決着の後に、奥様が守るべき大切なお子様との生活を再出発されることによって、奥様の「いのちの宝石」がまた力強く輝き始めるのを見させていただきました。

「いのちの宝石」は必ず再び輝き始めるものだと思います。けれども、残念ながら、それを信じることができず、命を落とされた方もいらっしゃいました。

人は人との関わりの中で生きています。ですので、「いのちの宝石」を傷つけるのも、その輝きを取り戻すことにお手伝いできるのも「人」なのだと思います。

昨今、ゲートキーパー（悩みを抱えた人に気づき、話を聴き、適切な相談機関につなぎ、見守る人）の養成が重要とされ、奈良県では「県民一人ひとりがゲートキーパー」となることを目標に掲げています。

我田引水のように恐縮ですが、私は職業柄「先生のおかげで生きてこれた」と言っていたことがあり、そのようなときは弁護士冥利に尽きるものです。しかし、仕事を離れても、ゲートキーパーの役割を果たせることは沢山あるのだろうと思います。家族、同僚等に対してだけではなく、たとえば、街で通りすがった人に笑顔で親切なことをしてあげられたときに、それによって「いのちの宝石」の輝きを失いかけていた人がその輝きを取り戻すきっかけとなることも、あるやもしれません。わたしたちは、いつもとはいかないとしても、できる限り、公私において、お互いに対する笑顔や親切を忘れずにして、そして、お互いの「いのちの宝石」を輝かせたいものと思います。

(当協会評議員)